『更級日記』

――初瀬参詣記事の考察――

原　順子

『更級日記』の研究は現在では既に、阿部秋生氏[注一]の「…現実離れのした夢のような世界に偏執するきらいはあったにしても、平安中期の女性として最も普通に近い生活をしていた性格の人であった、と思われる。」、更に「平凡ではあるが、問題にして然るべきものが多々あったはずなのに、平凡なままの日記で終わることになってしまったのは、あまりに素直で、世間しらずの受領の娘であったことに由来しているだろう。」という見方から抜け出し、次第により作品の価値を認めその中で虚構が認められる方向にある。特に、守屋省吾氏[注二]は「現実を軽視してひたすら雅びの世界に身を没入させ、いかにも無批判、無自覚なひとりの女を描出し、その微温的ないきざまを綴輯したのはあくまで作者孝標女の意図的作為であった。」と述べ、作品に描かれた孝標女がそのまま実際の作者の人生ではない問題を考察されたことは大変注目される。このことによって、平凡な女性の記録ということではなく、作品中の登場人物孝標女は作者が意図的に構成した人物であり、そのように作品において意図的に構成せざるを得なかった作者孝標女の人物像が見えてくる。つまり、当然作品論の中で虚構や作為の問題が出てくる。私も、本作品において描かれている作者が孝標女の実像とは考えない。そして犬養廉[注三]氏が作品冒頭部「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人…」に『源氏物語』憧憬による浮舟を想定しての虚構と考えられた説も認められつつあるが、私もそれを認める一方、その部分以外にも例えば「葵のただ三筋ばかりあるを、…」[注四]等の、作品中の一節に対する疑問を検討し、虚構について考察してきた。また石原昭平氏[注五]等の『更級日記』を物語から宗教への単純な流れということだけではなく、物語と宗教との共存がこの作品の基調をなしていると考える論も出てきた。私も、物語憧憬と信仰心との共存が、この作品の基調をなしていると考え、今日まで論を進めてきた。作品中特に目に付く参詣記事についてはこれまでにも考察してきたが[注六]、本論では特に大嘗会御禊日の初瀬参詣出立記事に注目したい。この一段に関しては、津本信博氏[注七]・守屋省吾氏[注八]・犬養廉氏[注九]等の説に異論はないが、今回私は少し違った角度、つまりこれが参詣の紀行という宗教的なまとまりを持ちながら作品全体の基調である物語的色調が凝縮された場面であることについて、特に次の三点をポイントにして考察を進めたい。まず（一）特にこの場面に人々の言葉や会話

が多く記されている点、(二)「そこら、桟敷どもにうつるとて」の一節について事実関係に疑問があり創作意図が感じられる点、(三)この場面が「音にのみ」の詠歌で閉じられている点、である。なお『更級日記』本文引用は「新潮日本古典集成」[注十]本に拠る。

(一) 人々の言葉や会話が多く記されている点について。

この会話という点については、津本信博氏が『更級日記の研究』[注十一]の中で、特に作品冒頭の幾つかの説話を中心に「事柄を生の形で紹介しそこに虚構と言わざるを得ない事情がある」と述べておられた。本論で取りあげる大嘗会御禊日の初瀬参詣出立記事では、人々の言葉や会話が大変多く記されていることが目を引く。その内容を見ると冒頭部では、御禊日出立についての周囲の人々の賛否の言葉が見られる。ここでは「…月日多かり、その日しも京をふり出でて行かむも、いとものぐるほしく、流れての物語ともなりぬべきことなり」(八八頁)と「はらからなる人」が反対しても、「ちごどもの親なる人」すなわち夫俊通は「いかにもいかにも、心にこそあらめ」と賛成し、良頼の兵衛督の家の前を過ぎる時には、「あれはもの詣で人なめりな、月日しもこそ世におほかれ」と非難されても「仏の御徳かならず見給ふべき人にこそあめれ。よしなかし。物見で、かうこそ思ひたつべかりけれ」と、孝標女にとっては心強い言葉が記されている。この言葉は「…とまめやかにいふ人、ひとりぞある。」と記すだけで閉じられているが、余韻にも嬉しさが感じられ続く段「道顕証ならぬ先にと、夜ふかう出でしかば、立ちおくれたる人々も待ち」(九〇頁)と出立後参詣の旅が進んでいく記述へと上手く繋がっているような印象を受ける。途中「あやしのわらはべ」の他「下衆の小家」の人々までもが見物に出掛ける御禊の日に、嘲笑されながらもその度に「ひたぶるに仏を念じたてまつりて」等の信仰心が描かれる構図を見ることができる。以降紀行的要素が強く、周囲の情景や人々の描写が多くなっていく。「高名の栗駒山にはあらずや」(九一頁)と聞いて、「いとものおそろし」く思う孝標女には、かつて古代の母親が恐ろしがって物詣には連れて行ってくれなかった場面(孝標女二十六~八歳頃か)等が思い合わされる。このことからも、「あやしげなる小家」「いみじげなる小家」での人々の会話を多く記したことは、単に孝標女の旅における非日常の対象への興味からということだけではないだろう。「いといみじうわびしくおそろし」と言いながら、旅中の自然風物よりも人間達に目を向け、それらの言葉を記した孝標女の作家的資質をも感じ取ることができるように思う。また山辺の寺で夢告を受ける場面は、作品中の夢告の場面がどれもそうであったように、夢告の言葉がそのまま次のように記されている。

…「何しにおはしつるぞ」と問ひたまへば、「いかでか参らざらむ」と申せば、「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて、うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて、…(中略)…御堂の方より、「すは稲荷より賜はる験の杉よ」とて、物を投げつるやうにするに、うちおどろきたれば、夢なりけり。(九三頁)

言葉や会話の記述について作品全体を見渡すと、『更級日記』が『蜻蛉日記』のように道綱母と兼家という特定の人間関係が中心ではないこともあって、人々の言葉や会話をそのままままとめて記した箇所は多くはない。例えば上京の旅の記中の竹芝伝説・富士川伝説では「…と語る」と、そのまま伝説の語り手の言葉を記す形が取られている。またこの二つの伝説の間に位置する足柄山の記述では、月もない夜に出会った遊女達と孝標女の供人とのやりとりが中心に描かれている。上京の旅の記では作者が十三歳という幼い年齢であったこともあり、執筆時の作者が記憶に残った供人達の会話を所々に記しながら書き進められたことが考えられるだろう。これらを別にすると次の二箇所を挙げることができる。まず作者十五歳（治安二年＝一〇二二）の姉との語らいの場面である。内容は主に侍従大納言（藤原行成）の御女の転生という猫についてで「五月ばかり、夜更くるまで物語を読みて起きゐたれば、来つらむ方も見えぬに、猫のいとなごう鳴いたるを」（三八頁）で始まる、幻想的で独特な一段である。続く『長恨歌』を求めての贈答歌の一段をはさんで位置された、やはり姉との語らいも姉の「ただ今、ゆくへなく飛び失せなば、いかが思ふべき」（四一頁）という一言は不思議な雰囲気を醸し出し、「荻の葉、荻の葉」と女を呼び応答のないままに帰っていく先払いの声を聞きながら歌を詠み夜明けまで二人で語り明かすという、この辺り一連が物語的色調の濃い描写となっている。もう一箇所は作者三十六歳（長久四年＝一〇四三）の時、祐子内親王家出仕での源資通や女房との春秋譚（八〇頁）である。これは作品中でも特に物語的場面として注目され資通の言葉を中心に描かれる。そこには詠歌を含めて全部で十二の言葉が記されるがそのうち八つまでが資通の言葉となっている。言葉の引用という点では量的にも初瀬参詣に匹敵し、内容は琵琶、箏の琴・横笛と資通の得意の音楽譚から春秋の優劣譚へと展開し翌年（長久四年＝一〇四三）の管弦の遊び、又の年の春の場面へと結局は「加島見て鳴門の浦に漕がれ出づる心は得きや磯のあま人」（八六頁）と詠んでその後会うことはなかった、という孝標女の心情を描いたストーリーである。初瀬参詣記事に人々の言葉や会話が特に多く記されていることは、先に述べた姉との語らいや源資通譚に見られる、物語的色調を濃く持つものとして理解してよいのではないだろうか。

（二）「そこら、桟敷どもにうつるとて」（八九頁）の一節において事実関係に疑問があり、創作意図が感じられる点について。

孝標女一行は「そのあかつき」に京を出発し二条大路を行程に選んで通って行った。後に掲げる資料の古記録からもわかるようにこの時代では大嘗会の御禊の場所は殆ど「二条東河」とされていたようで、二条大路は御禊の時には賑わう場所であったと考えられる。作者邸が一条近辺に位置していたとしても二条大路までにかかった時間は大して問題としなくてもよいだろう。しかし「あかつき」時には「そこら、桟敷どもにうつるとて、行きちがふ馬も車も、徒歩人も」と、見物のため桟敷へ移動する貴族達で既にかなり混雑していた様子が描かれている。「先に御あかし持たせ、ともの人々浄衣すがた」の作者一行は物見の人々とは逆行していったわけで、御禊日の光景としては異様であったことは十分に理解できよう。一生に

一度の大嘗会の御禊であるから、早朝から見物の場所を確保しようとする人々で賑わい、混雑している可能性はある。しかしここでは、「そこら、桟敷どもにうつるとて、行きちがふ馬も車も、徒歩人も」と予め桟敷を用意できる身分の人々、すなわち「貴族達」が早朝既に大勢出ていたことが強調されている。そこで、貴族達が桟敷があるのにも関わらず、夜深い暁頃から二条大路へ到着しておく必要があるのだろうか、という一つの疑問が生じる。これについて、まず孝標女一行が出発した時刻についてその表現を確認したいと思う。「そのあかつきに京をいづるに」（八九頁）の他に「道顕証ならぬさきにと夜深う出でしかば」（九〇頁）また「夜深く出でしかば、人々困じて、やひろうちといふ所にとどまりて」（九一頁）と、「あかつき」即ち夜深い時刻と繰り返し記されている。この場合「夜深し」というのは明け方から見てまだ夜の気配が十分残っている頃のことと理解できるだろう。またこの記事の十月二十五日はユリウス暦の十一月二十五日に相当し、季節から考えても一行が出発した時刻は午前五時に近い頃と考えられるのではないだろうか。その時刻頃から二条大路が既に桟敷へ移る貴族達やその従者達で賑わっていたと考えられ、またそれらは天皇の出御を見ることが目的と思われる。天皇の出御を待って見物するのであるから、法性寺の大門で後続の人々を待っている場面で、「田舎より物見にのぼる者ども、水の流るるやうにぞ見ゆるや。すべて道もさりあへず。…」と記されることからも、前もって物見の人々が集まってくる頃に天皇の出御があったことは考えにくい。ここで古記録に見られる御禊の天皇出御の時刻を確認したい。村上天皇から後三條天皇までの大嘗会御禊出御記事を次に示した。天皇名の次の（　）には御禊の行われた年月日及びその場所を、『大嘗会御禊日例』『日本紀略』『皇代略記』等によって記し、各々の記事の出典は引用文末に記した。

村上天皇（天慶九年＝九四六、十月廿八日・三條末鴨河）

- 廿八日、乙酉、天晴、是日有大嘗会御禊…（中略）…午二剋参着、帯弓箭就殿上座、主上御出、『九暦逸文』
- 廿八日、與前齊王立車二條路見物、午一刻検非違使尉已下巡検當路、二刻天皇幸鴨河『吏部王記』

冷泉天皇（安和元年＝九六八、十月廿六日・二條末東河）

- 廿六日丙子。天皇禊于東河。依大嘗会也。『日本紀略』

圓融天皇（天禄元年＝九七〇、十月廿六日・二條末東河）

- 廿六日、甲午、天皇御于東河、依大嘗会禊也、『日本紀略』

花山天皇（寛和元年＝九八五、十月廿五日・二條末）

- 廿五日、乙丑…今日御禊也、…午四點大御南殿（出カ）、『小右記』
- 廿五日、乙丑、大嘗会御禊。午剋御出。『日本紀略』

一條天皇（寛和二年＝九八六、十月廿三日・二條末）

- 十月廿三日、戊午、天皇禊于東河、依大嘗会也。『日本紀略』

三條天皇（寛弘九年＝一〇一二、閏十月廿七日・二條末東河）

・廿七日、辛卯、…仍御出、申二點從美福門御出、　『御堂関白記』

・閏十月廿七日。辛卯。二條末。…午二點打進鼓。同二點打行鼓。御出南門。御禊申二點。還御戌二點。　『大嘗会御禊日例』

後一條天皇（長和五年＝一〇一六、十月廿三日・郁芳門末東河）

・未刻出御。　『範國記』（注十二）により推定

後朱雀天皇（長元九年＝一〇三六、十月廿九日・三條以北）

・長元九年十月廿九日、癸酉、天晴、大嘗会御禊也、…（略）…未刻出御…（略）…作法皆准長和例也。　『範國記』

後冷泉天皇（永承元年＝一〇四六、十月廿五日・東河）

・廿五日辛未。天皇御禊東河。　『扶桑略記』

後三條天皇（治暦四年＝一〇六八、十月廿八日・三條末）

・廿八日丁卯、…（略）…大嘗会御禊行幸也、依為留守、相具少将

巳刻参内、…亥二點還御　『帥記』

村上天皇では『九暦逸文』で「午二剋参着、帯弓箭就殿上座、主上御出」また『吏部王記』「午一刻檢非違使尉已下巡検當路、二刻天皇幸鴨河」で、出御は午前十一時半頃である。花山天皇は後の『日本紀略』で、「大嘗会御禊、午剋御出」・『小右記』で「午四點大（出力）御南殿」と昼十二時半頃である。三條天皇は『御堂関白記』に、「申二點從美福門御出」・『大嘗会御禊日例』で「午二點打進鼓。同二點打行鼓。御出南門。御禊申二點。還御戌二點」と午後三時半頃と見える。後一條天皇については具体的な時刻の記事が見られないが次の後朱雀天皇の記事より推定できるので、まず後朱雀天皇の『範國記』を見たい。「大嘗会御禊也、未刻出御…（中略）…作法皆准長和例也」の記述から、御禊の方法・やり方は長和の例即ち後一條天皇のそれに倣って行なわれ出御が午後一時から三時の間であったことから、先の後一條天皇の出御の時刻もこれと同じ頃と理解してよいだろう。次の本論箇所の後冷泉天皇については諸記録に具体的時刻の記載が見られなかったが、『栄華物語』巻第三十六・後冷泉帝の記述に「御禊・大嘗会など例の事なり。…（中略）…作法・有様さきぐに変る事なし。いとめでたし。」とあることからも、やはり先例に倣って御禊が行なわれ出御の時刻も「未申」のいずれにせよ、午後になってからのことと考えて差し支えないようである。更に資料には掲げていないが、堀河天皇では「未申剋計行幸。天略如例。」（『御禊行幸服飾部類』）、そして鳥羽天皇では「午了許出御南殿、其儀如常」（『殿暦』）と十一時から昼の一時頃の出御であったことが見られる。また御禊が儀式として大体において作法に則って行なわれたとすれば、平安中期以降の天皇の御禊出御時刻は、「午の刻以降未申の刻」つまり早くても昼頃からのことであったと考えてよいだろう。村上天皇以前の例は資料には掲げていないが、わかる用例としては清和天皇が午前八時半・陽成天皇が午後二時・光孝天皇が午前十時半・醍醐天皇が午前十一時そして朱雀天皇が午前九時半という記事が見られた。

また、『江家次第』巻第十四の「大嘗会御禊定」（新訂増補故實叢書）の内容を見ると「寅二刻打装束鼓」から始まり、「次第司検校標杭事」「検非違使佐以下巡検當路事」等と、その時刻は記されていないが、出御に至るまでに各役職の儀式は殆どが大内裏の中で行なわれており、暁方から物見の貴族達が桟敷に駆け付ける意味はあまり無いようである。また早くからの検非違使巡検前に見物人が出ているのかはわからないが、法性寺の描写のように後にもっと南から人々が上って来ることから見ても、検非違使巡検後に見物人を入れないということもないだろう。そうすると「あかつきに京をい」でて間もない二條大路が一般の人々は勿論、桟敷に移動する貴族達で賑わうと描いたことには、ひとつの虚構があったと見做すことができるのではないか。

また、孝標女の信仰心の問題はこの前の年辺りから注目され始める。作者三十八歳（寛徳二年＝一〇四五年）の「今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知り果て」の一節を境に、石山・初瀬・鞍馬とこれまでになく参詣記事が連続して記される。この御禊日の初瀬出立の一段はそれらの中心として位置され、述べたように一つの虚構によって信仰心が強調されるだけの意味はあるだろう。またこの段では夢告の記事も注目される。作品中十一ある夢の記事のうち五例が参詣先等で見られたものである。それも孝標女二十六歳（長元六年＝一〇三三）の清水参籠から僧による代参の初瀬参詣（長元八年＝一〇三五年・二十八歳）、更に石山参詣（寛徳二年＝一〇四五・三十八歳）、そして本箇所の初瀬参詣と、連続する参詣記事で各々夢告を受けている。今各々の夢告について詳述しないが参詣先はいずれも観音信仰で名高い寺であり、この記事には山辺の寺での出仕の夢と長谷寺での神杉の夢との二つが登場する。前の山辺の寺での夢告「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」によって「うれしくたのもしくて、いよ〳〵念じたてまつ」（九三頁）り長谷寺参籠で神杉を賜る夢を見る。実際出仕については五十歳の記事「…時々立ち出でば、なになるべくもなかめり。」（一〇四頁）の状況となるが、神杉のことも夫を失って後の悔恨「初瀬にて前のたび、『稲荷より賜ふ験の杉よ』とて投げ出でられしを、出でしままに稲荷に詣でたましかば、かからずやあらまし。」（一〇七～八頁）の言葉によって、登場人物としての孝標女は夢告を受けてもそのまま功徳を伴わずに過ごしたことが知られる。ここに描かれたのは、御禊日に物見の人々から非難されながらも参詣へ向かう程の、孝標女の持つ信仰心の一面であると考えられるだろう。しかし作品前後の流れから見ると、その信仰心も将来や後世までをも念じたわけではない限りあるものだったということになるのだろう。

（※）宇治の渡り――『紫の物語』想起について

当時宇治近辺の土地は、京から奈良への道筋に当たり、文芸方面の素養豊かな女性たちにとっては物語世界をも想起させる名高い場所であった。『蜻蛉日記』上巻の道綱母の初瀬詣でも宇治院を過ぎて後、『かもの物語』という散逸物語を想起している。「明くれば、川渡りていくに、柴垣しわたしてある家どもを見るに、いづれならむ、かもの物語の家など思ひいくにいとぞあはれなる。」（安和元年

九月、道綱母三十三歳）（本文引用は小学館日本古典文学全集本[注十三]に拠る。一九五頁）また『源氏物語』手習巻横川の僧都が長谷参詣の帰りにこの宇治殿に宿った時の宿守の言葉でも、「おはしまさばや。いたづらなる院の寝殿にこそはべるめれ、物詣の人は常にぞ宿り給ふ。」（日本古典文学全集本[注十四]（六）二六八頁）、更に夢浮橋巻僧都が薫に語る言葉「かしこにはべる尼どもの、初瀬に願はべりて詣でて帰りける道に、宇治院といふ所にとどまりてはべりけるに」（（六）三六一頁）他においても、「宇治の院」は初瀬参詣の途上立ち寄る場所として登場している。『更級日記』のこの箇所でも、漸く辿り着いた宇治の渡りで、まず「心おごりしたるけしき」の舟の舵取りに眼をやった後「紫の物語に、宇治の宮のむすめどものことあるを…浮舟の女君の、かゝる所にやありけむなど、まづ思ひ出でらる。」と、何よりもまず『源氏物語』宇治の物語を思い起こしている。孝標女にとって「宇治」といえば即ち物語の世界だったのだろう。しかしここの一段は大嘗会御禊日に人々とは逆方向に参詣に進んで行く作者の信心深い姿を描くことで始まっている。物見の人々から非難されながら、その都度仏への思いを強く持ってきたが、宇治近辺を通ればやはり『源氏物語』が思い起こされ描かずにはいられなかったのだろう。これは矛盾であるとか作者の構成力の稚拙さということではあるまい。初瀬参詣の前年「今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知り果て」（八六頁）たと言い切り、孝標女自身功徳を積む決心をした。しかし執筆する孝標女にとっては信仰か物語かということではなくこれら二つの世界の間を心が行ったり来たりしており、孝標女の中で、信仰の世界と物語の世界とが共存していたことを意味するものではないだろうか。

（三）本段が「音にのみ聞きわたりこし宇治川の網代の波も今日ぞかぞふる」の詠歌で閉じられている点について。

初瀬参詣の一段の最後が歌で閉じられていることが、それまでの参詣記事との繋がりにおいて疑問を持つ見方もあるが、行きの宇治で浮舟を感慨深く想起した場所であるので、帰りのこの場面で再び宇治に思いを馳せて歌を詠んだとしてもそれは自然なことではないかと思われる。時節柄宇治川に据えられていた網代は、都の人々にとって興趣の対象である。『源氏物語』橋姫巻においても、宇治の八の宮の山荘の様子「網代のけはひ近く耳かしがましき川のわたりにて」（（五）一一八頁）を、また晩秋薫が山荘を訪れた折にも「秋の末つ方、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は網代の波もこのごろはいとど耳かしがましく静かならぬをとて」（（五）一二七頁）で「網代のけはひ」が描かれ、孝標女の心に深く留められていたこともあって「音にのみ聞きわたりこし」と自然に歌が詠まれたのではないか。また、歌の前の「いみじう風の吹く日」に「宇治の渡り」をする一節にしても、数年後の泉からの上京の際に描かれた大津の浦での嵐の様子が『源氏物語』須磨・明石巻の嵐や澪標巻田蓑の島の日暮れ方の描写が念頭にあると同時に、「よしなき物語歌」（一〇七頁）というように歌を詠むこと自体が物語的世界を表すと理解できる。このように考えると、「音にのみ」の歌で閉じられていることは、宇治の渡りで『源氏物語』想起を描写したと同じように、物語的基調の表れと考えてよいのではないだろうか。

『更級日記』の『源氏物語』享受等についてはこれまで石川徹氏[注十五]・犬養廉氏を始め、寺本直彦氏[注十七]等の多くの論に拠るが、この初瀬記事に限ってみてもいくつかのフレーズが指摘されている。「夜をあかすほど、千年を過ぐす心地す。からうじて明けたつほどに」・「あやしげなる下衆の小家」の部分が各々夕顔巻のフレーズ「…夜の明くるほどの久しさ、千夜を過ぐさむ心地したまふ。からうじて鳥の声はるかに聞こゆるに…」（（一）二四三頁）・「『花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける』と申す。げにいと小家がちにむつかしげなるわたりの…」（（一）二一〇頁）等を踏まえている点、更に「いみじう風の吹く日」の渡りの部分には、澪標巻須磨の嵐の描写の影響があると考えることができるだろう。また『更級日記』「…夕潮ただ満ちに満ち来るさま、とりもあへず、入江の鶴の声惜しまぬもをかしく見ゆ。」（一〇三～四頁）の箇所は『源氏物語』澪標巻「夕潮満ち来て、入江の鶴も声惜しまぬほどのあはれなるをりからなればにや、人目もつつまずあひ見まほしくさへ思さる。」（（二）二九七頁）、他に須磨巻等を踏まえていよう。一方語彙の面では、孝標女一行が「下衆の小家」に宿を取った折、その家の者達の話を聞いて「いとむくむくしくをかし」（九二頁）と記した「むく〳〵し」という語は「むくつけし」とは別に、同時代の他の作品においても本箇所と『源氏物語』に二例あるのみのようである。夕顔巻で夕顔を亡くした後の場面「…この人を空しくしなしてん事の、いみじく思さるるに添へて、大方のむくむくしさたとへん方なし。」（（一）二四三頁）、東屋巻で薫が宇治の隠れ屋に浮舟を訪ねた場面で、宿直人が「あやしき声」で様々に言い合うのを聞いて、「むくむくしく聞きならはぬ心地し給ふ」（（六）八四頁）と感慨を述べている。特に東屋巻であやしき声の東の里人達の会話を聞いて「むくむくし」と言っている点では、語の意味としてはもとより状況においても、『更級日記』のこの場面と符合するところが大きいのではないだろうか。

更に『蜻蛉日記』の初瀬参詣（安和元年九月、道綱母三十二・三歳）との関連は明らかだが、単に御禊日・地名・語彙の共通や類似だけではなく、『蜻蛉日記』では兼家の言葉が、『更級日記』では作品中唯一の夫俊通の言葉が記されている。また何よりも参詣出立記事の最初の部分が両作品共に夫の言葉を記しながら「あかつき方」に、一種昂揚した気分で出立している点に注目したい。その昂揚した気分が参詣記事一段の筆致となって綴られていくという一つのトーンは、明らかに他の冷静な散文の部分とは趣を異にしているように感じられる。

以上述べたように、出立時刻の問題を始め会話の多用や詠歌でのしめくくりが作品において物語的構成を支える要素となっているのではないかと考えてみた。御禊日の参詣出立と、信仰心の篤さを作為つまり一種の虚構を用いて強調するが、同時に宇治の渡りで『源氏物語』が想起され詠歌で参詣記事が閉じられている。この一段に即して検討した時、初瀬参詣という宗教性の強い紀行文の中で、功徳に励む孝標女の姿が描かれながら併せて物語的志向も強く描かれている。参詣記事というほんの一場面ではあるが、信仰心と物語世界憧憬の心が共存するという、作品本体の基調が凝縮された描写と

なっていることを指摘し、更に今後作品の他の部分についてもこのような点を検討していく必要があるのではないか等を検討していきたい。

注

一　阿部秋生氏「更級日記 ― 平安女流日記研究の問題点とその整理」『國文学　解釈と鑑賞』　七一頁　昭和三十六年二月

二　守屋省吾氏『平安後期日記文学論―更級日記・讃岐典侍日記』一〇三頁　昭和五十八年五月

三　犬養　廉氏「更級日記」解説　小学館日本古典文学全集　昭和五十八年

四　私論「『更級日記』論 ― 上京旅記の一節より ―」「葵のただ三筋ばかりあるを、『世ばなれてかかる山中にしも生ひけむよ』と、人々あはれがる」について

『新樹』（梅光女学院大学大学院）九　平成六年九月

五　石原昭平氏「更級日記の終末―紫日記・末法・兄の影―」『源氏物語とその周辺』　平成三年十一月　二一四頁

六　「『更級日記』物語論」　平成四年十二月二十一日　「日記文学懇話会」にて口頭発表したもの。

七　津本信博氏「更級日記　日記と紀行のオーバーラップ」『解釈と鑑賞』　五〇頁　平成元年十二月

八　同注二

九　犬養　廉氏「更級日記の虚構性―実人生とその自画像 ―」『國文学』　八九頁　昭和四十四年五月

十　秋山　虔氏校注『更級日記』新潮日本古典集成　平成四年四月

十一　津本信博氏『更級日記の研究』　二二五頁　昭和五十七年七月

十二　『範國記』は、国立公文書館蔵内閣文庫本『範國朝臣記』に拠る。

十三　木村正中氏・伊牟田経久氏校注・訳『蜻蛉日記』日本古典全集　昭和六十年二月

十四　今井源衛先生・阿部秋生氏・秋山虔氏校注・訳『源氏物語』日本古典文学全集

十五　石川　徹氏「源氏物語の影響を受けた平安後期の文学」『國語と國文学』　昭和三十一年十月

十六　犬養　廉氏「更級日記臆断」『國語國文研究』　昭和三十五年十月・『平安朝日記Ⅱ』　昭和五十年十一月

十七　寺本直彦氏「更級日記『宇治の渡り』の段試解」『青山語文』（国文学年次別論文集3）　昭和六十一年・「更級日記の拠る源氏物語の本文」『熊本大学国語国文研究』（国文学年次別論文集3）　昭和六十一年